

ジョン・ダンの‘Holy Sonnet 17’と妻アンの死

山 本 千鶴子

〔抄 録〕

ダンの詩‘Holy Sonnet 17’は、ダンの妻アンの死をめぐるものである。この詩において詩人は何を表明するのだろうか。本稿は、この主題について、本詩を採りあげ考察する。主にボールド（R.C. Bald）の作品 *John Donne: A Life* とヘレン・ガードナー（Helen Gardner）の編著 *John Donne: The Divine Poems* 等を援用しながら考究するのを目的とする。それで明らかになるのは、妻の死がダンを大きな悲嘆に陥らせ真摯に神のことを考えさせたこと、そして、詩人は、絶望的な悲嘆の中で、彼自身の心を見つめ、神へ祈る。そのことにより最後に、詩人は神の光を見出す。詩人と妻アンとの強い絆にたいして、神は妬みを持ち、詩人にこの世の愛を払拭するように神の愛を明示する。詩人はそのような神に不満を抱きながらも神との合一を望むが、そのことは無理であるのを悟る。神がダンへ妻以上の愛を求められるのは、詩人に世俗の愛を諦めさせようという神の愛であろう。詩人は、心の中に妻アンの居場所をつくり、説教者として故人と共に人生を歩むことを決心する。神の言葉を述べ伝える事は、ダンの生きる力となる。このように、詩人は妻の喪失の悲嘆を通して生きなおす力を得たのが判明する。

キーワード 生きなおす力、死、悲嘆、喪失、Holy Sonnet

序

ボールドは、ダンに精神的危機があったことを次のように言う。

He was in doubt of his salvation, and therefore terrified at the thought of death. He was also haunted by recollections of sin, so that he seemed the chief of sinners and his sins abounded above those of all the ‘numberlesse infinities Of soules’ who would arise to go to the Last Judgement. (234)

上記の引用より判明するのは、この時期のダンが、罪の意識にさいなまれて心の救いに疑いを

持ち、そして死を恐れていたことであろう。引用文に含まれている“death”や“sin”等の語は、‘Holy Sonnets’の中に出てくるものである。例えば、前者は、‘Holy Sonnet 6’に、後者は‘Holy Sonnet 3’などに使用されている。また、“soules”も‘Holy Sonnet 4’に表われている。これらから、罪や死に捉われている詩人の精神の危機が、‘Holy Sonnets’に表明されているであろう。

そのような状況の中で書かれた‘Holy Sonnets’にはどのような特徴があったのだろうか。‘Holy Sonnets’についての注意をひく批評家にマーツ (Louis L. Martz)、ガードナー、ピーターソン (Douglas L. Peterson) がいて、各自の立場から論じている。

マーツは各ソネットを“a separate meditation or ejaculation”と見做している(43)。ガードナーはソネットの配列に心を注いで、19篇のソネットを‘Holy Sonnets’ (1633) 12篇、‘Holy Sonnets’ (added in 1635) 4篇、‘Holy Sonnets’ (from the Westmoreland MS.) 3篇に分け、前者12篇と4篇のソネットはそれぞれが〈sequence〉として連続したグループとして成り立つといい、前述の二つのグループに彼女はイグナチウス・ロヨラ (Ignatius Loyola) の *Spiritual Exercises* (原題 *Exercitia Spiritualia*, 1548. 本稿では英訳名を使うこととする) の反映をみることに(65)を次のように述べる。

A meditation on the Ignatian pattern, employing the ‘three powers of the soul’, consists of a brief preparatory prayer, two ‘preludes’, a varying number of points, and a colloquy. The preparatory prayer is ‘to ask God our Lord for grace that all my intentions, actions and operations may be ordered purely to the service and praise of His divine Majesty’. The first prelude is what is called the *compositio loci*: ...The second prelude is a petition....⁽¹⁾ (I)

ガードナーは、上記の黙想法を提示し、‘Holy Sonnet’ (1633) 1は“a brief preparatory prayer”、‘Holy Sonnets’ (1633) 2-4は“two ‘preludes’”、‘Holy Sonnet’ (1633) 5は“a varying number of points”と“a petition”そして‘Holy Sonnets’ (1633) 7-12は、そのうち“a colloquy”という神との対話であるという (liii)。しかし、彼女は、前述の‘Holy Sonnets’ (from the Westmoreland MS.) 3篇の詩を“sequence”として連続したグループとは異なるグループとして捉えている (xli-xlii)。その理由は、イグナチウス・ロヨラの *Spiritual Exercises* の反映が見られないからである。つまり、それらの内の一篇の‘Holy Sonnet 19’は、ダンの感情をうたっている。残り2編の内の一つ‘Holy Sonnet 18’は、教会の問題をとりあげてよんでいる。そして残り最後的一篇‘Holy Sonnet 17’はダンの妻の死をめぐるものをうたう。このように、これら3篇 (from the Westmoreland MS.) の詩は、それぞれが、先述のように異なることをうたうものである。ダンの‘Holy Sonnets’の内容は、黙想の結実

であり、神を意識しながら詩人の内面に展開された一つの内的ドラマを表わしており、ソネットの形式によって、ダンの圧縮された感情を生み出していると言えよう。そして詩人の内的状況に眼が向けられ、かつて恋愛詩においてそうであったように、それ自体ひとつのまとまった形に整っている世界を創り出している。‘Holy Sonnets’の世界は、黙想により、詩人の心の世界である。何故かという、詩人と神との対話であるからである。そこに展開されるものは、‘Holy Sonnet 1’でうたわれている悪魔、‘Holy Sonnets 7-12’での神、‘Holy Sonnets 3, 6, 13’などにうたわれている死などとの闘いであり、根本までおしきわめれば、己自身との闘いであるとも言える。

最後にピーターソンに焦点をあててみよう。彼はダンの‘Holy Sonnets’は「悔悟」という形のもっともよく実ったものだと見做している(330-48)。どういう意味でそうかといえば、‘Holy Sonnets’ (1633) 2, 3は精神的な面の死の瞬間を取り扱うからである。そして、ピーターソンは「悔悟」の具体的な表れとして主要なテーマ“fear and love”と“contrite sorrow”をあげており、‘Holy Sonnets’ (1633) 1-6に“fear”、‘Holy Sonnets’ (1633) 7-12に“love”、‘Holy Sonnets’ (added in 1635) および ‘Holy Sonnets’ (from Westmoreland MS.) に“contrite sorrow”をそれぞれ当てはめている。そして、このようなテーマを通してピーターソンは詩人の感情の高まりを認めている。

ダンの“Since she whom I loved”という書き出しではじまるソネットは、ダンの妻アンの死をめぐるものである。彼女と死別することにより、詩人は、それからどのような影響を受けて何を得るのかを考察する。この詩は、1892年に Westmoreland 伯爵家の蔵書から新たに発見され、詩人の他の作品には含まれていない3篇のうちの一つである。

妻アンは1617年の8月、12番目の子の産褥で没した。詩人が、愛する人を喪失した時の様子を、アイザック・ウォルトン (Izaak Walton) は、次のように言う。“Thus as the *Israelites* sate mourning by the rivers of *Babylon*, when they remembred *Sion*; so he gave some ease to his oppressed heart by thus venting his sorrows: Thus he began the day, and ended the night; ended the restless night and began the weary day in *Lamentations*.⁽²⁾”

(51-52) この引用文の“*Sion*”は、イスラエル人たちには、彼らの象徴であり、聖丘でもあった。その大切なものが荒廃してしまった。彼らは、それを思い出した時は“*Babylon*”の河のほとりに立って嘆き悲しんだ。“Since she whom I loved”ではじまる詩の中で、詩人は、妻アンをその“*Sion*”にたとえている。彼女が、この世を去ってしまったことに、詩人は、胸が押しつぶされそうになるが、生前の妻アンに思いを馳せることによって多少なりとも悲しみを軽減しているのが、引用文の2-3行目“he gave some ease... by thus venting his sorrows”に表われている。そして、次の“Thus”から“*Lamentations*”までの行で、詩人が、妻アンと精神的にも肉体的にも強く結ばれていたことが窺える。特に“restless night”については、詩人が、夜になると妻アンを思い出すからであろう。詩人が、終日、悲痛の内にありな

がらも彼の心の中に故人の居場所をつくっているのが考えられよう。

さて、これから本稿で考察しようとするのは、前述の Westmoreland 写本にだけ収められている3篇のうちの一つである。ここで採りあげるのは、ダンが、妻アンの死に際して洩らした悲しみと神の愛を希求する心をうたうものである。

身分が不安定で、5人の子供を亡くし、生き残った7人の子供達の父親ダンをこの世に残して彼女は逝った。詩人は、残された子供達に決して継母によるつらい思いはさせないと誓ったので、この世における彼の一切の喜びと共に、健気な妻を涙ながらに墓に葬って、孤独な生活に引きこもった (Walton 51)。前述の「子供達に決して継母によるつらい思いはさせない」というのは、ダンの再婚の考えがないことを示唆しているであろう。詩人が二度目の妻を迎えることは、最愛の妻であったアンに対する冒瀆になると思ったのでであろう。詩人は、妻アンと死別後の変化を捉えて前向きな生き方を示唆している。大切な妻を失った詩人は、まるで別世界に投げ出されたような状態である。このような悲嘆の日々を送るダンが、不安の中で見出したのは誰にも代われないものがある。それは、7人の残っている子供達の父であり、内面的に生きることであろう。当然、この詩は詩人が聖職になった後1617年以降にうたったものと言われる (Shawcross 415)。この詩で、詩人は妻の喪失の悲嘆をうたう。この時期に、ダンがうたった「エレミヤの哀歌、主にトレメリウスに拠る」('The Lamentation of Jeremy, for the most part according to Tremelius') について、E.K.Chambers は、おそらくダンの妻が亡くなった年であろうと記している (249)。先述で、“Sion” を詩人の配偶者アンにたとえているように、この詩においても詩人は、妻アンを偲び、神に祈ったことが考えられるであろう。

ダンの妻の死は、ダンにとって紛れもない事実である。妻の死は、牧師職就任よりさらに大きな力をダンの心にもたらしたように思われる。それは、ダンが悲嘆にくれていた日々から立ち直ったことから推察できよう。妻アンの死後にダンの心が、天国に向くようになったということからも明らかであろう。それについてガードナーは彼女の編書 *John Donne: The Divine Poems* (xxxvii) において、妻の死が詩人に天空への思いを抱かせるのを次のように述べている。“The image of Christ as Lover appears in only two of his poems—both written soon after the death of his wife.” (xxxvii) この引用の “Christ as Lover” から妻アンが、ダンに如何に影響を与えていたのが窺える。さらに、“only two of his poems” と書かれているように、詩人は「死別」した妻アンに関する詩を2編うたっていると言われている。それらは *Songs and Sonnets* に含まれる妻を思い出す詩 ‘The Anniversary’ と本詩であろう。前者について、筆者は、アンを称えるものとして別の機会に考究したい。ここでは、後者の ‘Holy Sonnet 17’ を採り上げダンの妻の死が、詩人に与えた力とは何であるかを考察する。

1. ダンへの神の愛

先ず、この詩の全詩を引用する。

Since she whom I loved hath paid her last debt
To nature, and to hers, and my good is dead,
And her soul early into heaven ravished,
Wholly in heavenly things my mind is set.
Here the admiring her my mind did whet
To seek thee God; so streams do show the head,
But though I have found thee, and thou my thirst hast fed,
A holy thirsty dropsy melts me yet.
But why should I beg more love, when as thou
Dost woo my soul, for hers offering all thine:
And dost not only fear lest I allow
My love to saints and angels, things divine,
But in thy tender jealousy dost doubt
Lest the world, flesh, yea Devil put thee out.⁽³⁾

(‘Holy Sonnet 17’ ll. 1-14)

上記の詩1-2行目に「愛する彼女が死んで今はいない」というダンの悲嘆が表われている。愛する人との死別は喪失体験の中でも、最大のものであろう。ダンの良き理解者であり、協力者でもあった妻が、神に召されて天空に去ってしまったのである。詩人は、この詩の9行、10行に妻アンへの愛の深さをうたっている。

さて、詩を考察していくことにする。本詩、1行目から2行目の解釈について赤松桂子は、「私の愛したあの女がその最後の負債を自然に支払い、／彼女の幸福のためにも、私の幸福のためにも死んでしまった」(220)とあり、岡村真紀子は、「愛する妻が『死んでしまって今はいない』という悲嘆を綴るのである、その死は…(彼女は最後の借りを自然に返してしまった)」(192)という意味に捉えている。ここで、両者は“nature”を「自然」と訳出している。しかし、岡村真紀子はOEDを用いて説明をしながら“nature”を「神」(193)であると捉えている。一方、赤松桂子は、その解説がない。筆者は、岡村真紀子に同意であるが“nature”を「神」の言葉をかえて「創造主」と考えたい。何故なら、人間、天、地などの自然界は、創造主によるものであるからである(*The Holy Bible*, Gen.1.1-31)。二人とも“last debt”については詳細に述べていない。筆者は“last debt”を「アンの最後の出産」と捉えたい。その

理由は、12番目の子どもの死産は、妻アンにとって最後の出産であること、その最後の嬰兒も彼女も創造主に負うものであること (*The Holy Bible*, Gen. 1.1-31)、そして、彼女の死と同時に両者は、創造主のもとへいくであろうこと、また、彼女と子どもの身体は土に返ることになるからである。“my good is dead” にはダンの悲嘆の様子が表われている。その理由として、妻アンは、結婚してから彼のよき伴侶であり、喜びも悲しみも共に分かちあってきたであろう。その妻との愛情が、彼女の死により全て無になった、と言えよう。続く3行目の“ravished”は“transported joyfully”と捉えると「早い時期に彼女の魂は天国に喜んで連れ去られたのである」何故、早く死んで天国につれられるのはよろこばしいことなのか。ダンの結婚は、彼の人生の由々しき誤りである(60)とウォルトンは言っている。それは何故か。詩人はアンと秘密結婚をしたことにより、彼女の父の逆鱗にふれ、国事詔書の秘書という立派な地位を失ってしまい、その後、聖職に入るまで彼の独立を保障すべき地位を得ることはできなかったからである。しかし、妻アンは、夫以上に苦悩したのではないだろうか。もともと脆弱な妻は、結婚して以来絶えまない妊娠と出産に疲れ果て、休息が死であっても喜んで受け入れたであろう。ボールドは妻アンについて次のようにいう。“Ann Donne was thirty-three when she died...to die worn out by child-bearing...Twelve times, her epitaph recorded, she had been brought to bed.” (326) この引用で明らかなのは、妻アンにとって身体の疲労度の大変さであろう。それは“to die worn out by child-bearing”や墓碑銘に刻まれている12回という数字からも出産が毎年のものであったのを表わしている。この詩、4行目の“wholly”はhollyとの地口となっている。妻アンは、ダンの心を神に結びつける働きをし、いまや、詩人の心を天国だけに向ける。この世での愛を断たれたダンはそのことで、妻を亡くした悲しみを和らげようとする。

本詩、5行目の“whet”の目的語は“my mind”そして“To seek thee God;”は“whet”にかかる不定詞と解釈すると、「この世において彼女を崇める事が神のあなたを捜し求めるようにと私の心を刺激した。」という内容になる。詩人は、妻アンを模範としてより敬虔な生活を送るように促されていたことから考えると、同じ6行目の“show the head”は“reveal their source”と解釈できる。すると「そのように、流れは源を示すもの」となる。そして“head”は神、“stream”は妻アンを表わし、神が源になり、妻が流れと捉える。詩人は妻を通して神を見いだしたのである。ダンは、妻が死ぬまで彼女を仲立ちとして遠いところにある神を求めていた。そのような神が聖なる愛によって詩人を導くのである。詩人の魂も神との融合の境地をひたすらに夢想し熱望する。しかし、肉体と結合して一個の生ける人間を形作っている靈魂にとっては、神との融合の前に、先決問題として霊肉の分離がある。そして、死こそが唯一のとは言わないまでも最大の霊肉分離の契機である。ダンが妻の死によって、さらに、彼の考えが死の方向へ向く。

ウォルトンが、ダンを苦悩するヨブ (Job) に例えて次のようにいう。“For then, as the

grave is become her house, so I would hasten to make it mine also; that we two might there make our beds together in the dark.⁽⁴⁾ (51) この引用に見られるのは、もしも、可能であるならば、ダンが、今すぐにも妻の墓に行って彼女と居たい、と願う詩人の願望である。ここに、ダンの思いが、死に向かう一つの理由として考えられるであろう。死以外にも人間の魂と神との結合状態をつくりだす契機がないではない。それは、霊的な Ecstasy である。しかし、この Ecstasy は、死のように永久的な分離ではなくて一時的な神との結合にすぎないし、特殊な神秘主義者などに許されるものである。ダンは、この世の愛を天国への愛に昇華させようと夢想する。しかし、それは、すぐに果たされないことがわかる。

この詩の7行目の“fed”は“relieved; satisfied”である。“dropsy”は“immoderate desire for more”で際限ない欲望、困った状態を比喩的に表現している。その具体的なことが本詩の9行、10行の2行に述べられている。詩人は、聖なる愛の不満を神にはっきりと述べている。“more”は妻アンの旧姓に因む More に関して神の愛を更に求めることについて辛らつな地口であろう。その語は、詩人の不満の度合いを明らかにしている。その不満とは、神が“all”を提供してくださっても、聖なる愛は、此の世の妻アンのものより不十分であるという詩人の気持ちである。妻アンの魂を奪われた神がダンの魂に求愛されているのである。しかし、詩人は、妻を亡くした悲嘆の下で妻アンに対する愛以上のものを何故求めなければいけないのかを神に問うている。世俗と聖なる愛の調整の問題は、次の節で考察するこの神の“tender jealousy”の発見で解決するであろう。

2. 妻アンをめぐるダンに対する神の“jealousy”

この詩の最後4行において、詩人は何を見出すのか。本詩、最終4行において、妻アンと詩人の絆は、世俗の愛だけでなく“saints and angels”に与えられる聖なる愛にも腹を立てる神によってとても妬まれている。この嫉妬深い神は、全ての愛が直接自分に向けられたのではなく、聖者や天使たちへの愛に向いているのではないかと恐れている。更に、この妬み深い神は、詩人の魂を誘惑するこの世や、肉体、それに悪魔によって、自分が神を思う詩人の心の中から追い出されてしまうのではないかと心配している。この詩は、神がダンに強制的に他の世俗の愛をあきらめさせようという望みを表現している。こうみえてくると、この詩における神の“jealousy”は、聖なる愛の明示になるのである。

神による救いを挟んでの神と詩人との劇的な関係、そして、この関係の発展し昇華した究極的境地としての神と詩人の魂の同化こそ、ダンの宗教詩に関して最大の意図である。エドモンド・ゴス (Edmund Gosse) は、1617年の冬におけるダンについて次のように述べている。“At that juncture, under special conditions, and at the age of forty-four, he dedicated himself anew to God with a peculiar violence of devotion, and witnessed the dayspring

of a sudden light in his soul.” (99) この引用が明らかにしているのは、詩人が44才の時に真摯な祈りで再び、自分自身神に専念した。すると、突然、詩人の心に光が灯ったのを見たことである。いってみれば、ダンが恋愛詩でうたったように、二人の恋人が愛しあい結びあって究極的な霊肉の一つに落ち着くという、そういう意味の神との合一なのである。ダンの愛は、霊的存在のままに神の栄光に包まれて輝く美しきものとはいえ、人間は神ではない。神にはなれず、しかも動物ではないという、宙ぶらりんの状態にあって、詩人が、連帯を、合一を、同化を求める対象は実は神であるといえるであろう。

ところで、宗教詩人としてのダン（説教者、聖職者としてではなく）の場合、神との魂の合一によって、彼の恋愛詩が強烈な自己中心癖を発散させる。恋愛詩は、個人的な性格のものであることと上でのべたことは完全に軌を一にしている。恋愛詩を創った頃の詩人ダンにとって、人間それぞれの間の連帯意識などは、彼の視界にはないものであった。今や、最愛の妻が神に魂を召喚されて天空へと旅立ってしまい、詩人は前述の連帯意識に気がつき、妻アンの魂を呼び戻そうとしても、彼女のそれは永遠に戻らない。しかし、ダンが一途に妻のことを思う心情を神が妬み、前述の聖なる明示となったと考えられる。ここに、世俗と聖なる愛の調整となる神の“tender jealousy”の発見となるであろう。

3. ダンの説教者への resolution

ダンは、何故、妻の死後引きこもっていた家から出て、再び、説教をし始めたのであろうか。それは、妻アンの死別という悲嘆の中にあって自分自身の心を見つめ内面化できたからであろう。このような詩人について、先人達の考究を参照してみよう。

ポールドによれば、妻アンが、詩人に与えた影響の深さは、世俗的な作風から宗教的な詩への関心への変遷において著しいと言う (326,328)。ウィリアム・ザンダー (William Zunder) は彼の著書 *The Poetry of John Donne* で、‘Holy Sonnets’ がダンの人生における苦悩の結果として神へ向かうことを表わしていると述べている (94)。ガードナーは、彼女の編著 *John Donne: The Divine Poems* でこの詩について解説している。本詩2-3行目に“...and my good is dead, / And her soul early into heaven ravished”と詩人がうたっている“my good”に妻アンが反映されている。

ここで、議論の都合上、黙想法について多少触れなおしておくことにする。黙想法は、神に仕え、神を賛美するための知的鍛錬を目的とするものであった。一定の期間、毎日数回、順序正しく黙想を行なうことによって、精神を鍛えようとするものであった。黙想の方法は、簡単に言えば、まず〈場の設定〉をし、次に〈分析によって神学的な意味〉を理解し、最後に、〈神の愛に賛辞と祈りを捧げる〉というものであった。具体的に考えてみると、例えば、キリストの受難がテーマであれば、まず、現実に関与している場面を感じなければならな

いので、十字架上のキリストが血を流しているその場面を思い浮かべ、次に、その神学的な意味を考え、人間の罪とキリストによる救済を認識する。最後に、キリストのように命を賭けてまでの神の愛の強さに驚き、感謝の祈りを捧げる。

ガードナーも述べているように、このソネットには黙想法の形式によって書かれた詩でないことが理解できよう。本詩7行目から10行目に詩人の心情を吐露しているのが窺えよう。ウォルトンによれば、妻アンの死後、孤独な生活に引きこもっていた詩人が、家から出たのは説教をするためであったことを次のように言う。

His first motion from his house was to preach, where his beloved wife lay buried
(in *St. Clements Church, near Temple-Bar London*) and his Text was a part of the
Prophet *Jeremy's Lamentation: Lo, I am the man that have seen affliction.*⁽⁵⁾ (52)

彼が引きこもっていた家から、第一歩を歩み出したのである。その説教の場所は最愛の妻が眠っているテンプル・バアの近く、聖クレメント教会で、テキストは「預言者エレミヤの哀歌」(“the Prophet *Jeremy's Lamentation*”)の1節「見よ私は災難をみたる人なり」であった。その言葉はまさしくダンに似つかわしい。

詩人は、妻アンの喪失体験を通して神に真摯に祈り、神の愛を希求している。その結果、詩人は、神の福音を述べ伝えることを決心したのであろう。人が言葉を発して表現するということは、生きている証である。詩人にとってこのことは心の再生力となった。そのことより、ダンは、彼自身の悲痛の発露を見いだしたのである。彼は、生きなおす力を得たのである。

結語

本稿では、ダンの詩 ‘Holy Sonnet 17’ について、何を表明するのかを考察してきた。ここで、論を閉じるにあたって、今までの考察を各セクション毎にまとめをし、詩が表明した事を確認しておこう。

1. ダンへの神の愛

ここでは、妻アンの喪失というダンの悲嘆について明らかにした。1行目と2行目に表われているのは、妻が亡くなってしまった詩人の悲しみである。3-4行目には、妻の魂が神に天国へ連れて行かれ、詩人の思いも彼女のいる天国へ向けられるようになったことをうたうことを検証した。5行目と6行目において、源は神であり妻が流れとなって詩人は神を見出して詩人の考えが死の方向へ向くようになったのが判明した。ダンは現世の愛を天国の愛と結びつけようとするが、それは無理なことを理解することを表わした。7行目と8行目で詩人は聖なる

愛の不満を述べていた。その理由は次の2行ではっきり表わしていた。それは、神が全てを提供してくださっても、詩人が妻アンに抱く以上の愛を神に求められないというものであることを考察した。

2. 妻アンをめぐるダンに対する神の“jealousy”

本詩11行目から14行目において、今まで考察してきた詩人と妻アンとの強い絆は、神によって妬まれていることを表わしていることを考察した。何故かと言うと、神は詩人の魂がこの世の愛や肉体そして悪魔に誘惑されることにより、自分が詩人の魂の中から追い出されるのではないかと心配するからであった。神がダンへ求める愛は、詩人が妻アンに抱く以上のものであった。このことは、他の世俗の愛をあきらめさせようというダンへ聖なる愛の明示であることを表明した。

3. ダンの説教者への resolution

ここでは、妻アンの死が詩人の詩の作風に与えた影響について述べた。そして妻の喪失という悲嘆のもとに、詩人がひきこもっていた家から妻の死後初めて足を踏み出すことについて考察した。このように、‘Holy Sonnet 17’にはダンの神への愛の希求の気持ちが表われている。さらに、神を意識しながら詩人の内面に展開された一つの内的ドラマを表わしており、ソネットの形式によって、ダンの圧縮された感情を生み出しているといえよう。そして詩人の内的状況に眼が向けられ、かつて恋愛詩においてそうであったように、それ自体ひとつの完結した世界を創り出しているといえる。ダンは自分の心を見つめ、内面化している。詩人自身の言葉で自分を表現できるということは、生きる力となっている。人間の命は、身体だけでなく、精神性の命でもあり、精神性においては、決してなくならないのが本詩の考察で理解できる。精神的に豊かに生きていくなら、精神的いのちは、更に上昇するようになる。この世に残された人の心の中に住み続け、さらに、残された人の人生をふくらませる。

恋愛詩の中では、詩人の指向するものは自己と相手女性との真の合一であった。彼にとっては二人の恋人における魂の結合が肉体の合一を経てこそ到達され得るものであったと同様、詩人は妻アンとの愛の結合と言う感覚的な手段を手掛かりに、神との霊的な結合を模索しようとしたのである。聖職者となることを真剣に考え、また人からも勧められていた時期のダンにとっては、この問題は切実な要請であった。本詩、5-6行目の“Here the admiring her my mind did whet / to seek thee God; so streams do show the head”これはダンが妻の死後告白していることでもあった。妻アンの愛という河の流れをたよりに運行して遂に水源の神の源までたどりつこうとしたダンは、妻の死後、彼女の愛を神への愛に昇華させようと専念した。詩人のこの昇華作用は希望の如く順調になされたのだろうか。この詩、7-8行目の“*But though I have found thee, and thou my thirst hast fed, / A hory thirsty dropsy*

melts me yet.”においては、妻アンが神への架け橋となっていたのに、彼女の死により詩人が神の愛への感覚的なアプローチが出来なくなったもどかしさと焦燥が読者に感じられるだけである。かつて妻アンとの間に相結んだゆるぎない自己完結的な小宇宙の創造、そしてその中への自我の埋没という、これと同質の神との絶え間ない交わりを感得し、神の愛にエゴの脱却を見いだした詩人の霊的歓喜がここにはない。その根源は地上的な愛のうちにそして神との融合を果たし得なかった点に潜んでいる。しかし、詩人はこの詩において、まるで自分の恋人に対するかのような態度で、情熱をこめて、恋愛的な修辞で“Love”としての神に愛人としての思慕をうたっている。

いまや天国に逝った妻アンを神と同一視することはダンにとって当然である。何故かという、妻は神に召されて天空へ逝ったからである。彼女への思いが昂じた時に、このかつての妻アンへの回想を手がかりに超越的な恍惚まで至ろうと望んだのも、自然なことである。詩人は、妻との死別という喪失体験を通して、彼自身の心の中を見つめている。それで判明するのは、ダンが神へ祈り、神の福音を述べ伝えることを決めたことである。詩人が、自分の口から言葉を発することは、生きる力を表わしていると言えるであろう。妻の埋葬後、引き籠もっていた家から初めて出るのは説教をするためである。このように、ダンは‘Holy Sonnet 17’において、神に祈り、詩人の生きなおす力を得たのである。

〔注〕

- (1) イグナチア様式についての瞑想は、「魂の三つの力」を利用して、短い前置きの祈り、多くの点で変わる二つの導入部と会話から成っている。前置きの祈りは、「全ての自分の意志、行動と効果が、神の聖なる権威に純粹に奉仕し賛美するよう定められているのかもしれないという慈悲を私達の主なる神に求めることである。」最初の導入は、いわゆる場の設定、… 2 番目のものは嘆願である…。
- (2) 「シオンを思い出した時に、イスラエルの人々がバビロンの河のほとりに佇み嘆き悲しんだように、彼はこうして悲嘆に暮れることで、押しつぶされた心の苦痛を多少とも軽くしていた。このようにして彼の一日は始まり夜があけた。悲嘆に暮れるうちに眠れない夜があけ、疲れ果てた一日が始まるのであった。」旧約聖書の一書；紀元前586年の Jerusalem の陥落とそれに伴う荒廃とユダヤ人の離散を嘆く 5 つの詩から成る。
- (3) 私が愛した彼女は、彼女の最後の人生の借り物を創造主に返し、
そして私の大事な妻が死んでしまったのだ。
そして早い時期に彼女の魂は天国に喜んで連れ去られたのである。
そこで、私は、天国のことだけに私の心は向けられるようになっている。
此の世において彼女を崇める事が貴方である神を捜し求めるために私の心を研いだのである。

そのように、流れは源を示すもの
しかし私は貴方を見出した、貴方は私の渇きを癒されたけれども、
聖なる渇きの際限ない欲望が私を溶かすのである。
彼女の魂のために貴方のものを差し出しながら、貴方が私の魂に求婚するときに、
私はどうして更なる愛を求めなければならないのですか。
そして、神聖なものである聖者、天使等に私の愛を
分け与えはしまいかと恐れるだけでなく、
此の世や、肉体そのうえ悪魔が貴方（神）を締め出すのではないかと
あなたの優しい嫉妬によって心配されている。（「聖なるソネット17」1-14行）

- (4) というのは、その時、墓が彼女の家になるように、私は急いでそれを私の棲家にもするであろう。つまり、私たち二人は暗闇の中に私達のベッドをならべられるようにする。
- (5) ダンの最初の行動は、引きこもっていた彼の家から出て説教をしに行くことであった。
その場所は、最愛の妻が埋葬された（ロンドンのテンプル・バー近くの聖クレメント教会）であった。そして彼のテキストは預言者エレミヤの哀歌、「見よ、私は災難をみたる人なり」であった。

[Works Cited]

- Bald, R.C. *John Donne: A Life*. Oxford: Clarendon, 1970.
- Chambers, E.K., ed. Introduction. *Poems of John Donne*. 1896. By George Saintsbury. Vol. 1. London: Routledge, 1904.
- Donne, John. *The Divine Poems*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Clarendon, 1969.
- . *John Donne*. Ed. John Carey. Oxford: Oxford UP, 1990.
- . 『ジョン・ダン全詩集』湯浅信之訳 名古屋：名古屋大学出版会，2002.
- Gosse, Edmund. *The Life and Letters of John Donne*. 1899 Vol. 2. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1959.
- The Holy Bible: King James Version*. American Bible Society: New York, 2005.
- Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven: Yale UP, 1954.
- Peterson, Douglas L. *The English Lyric from Wyatt to Donne: A History of the Plain and Eloquent Styles*. Princeton. N.J.: Princeton UP, 1967.
- Shawcross, John T., ed. *The Complete Poetry of John Donne* (Anchor Seventeenth Century Series). New York: Doubleday, 1967.
- Walton, Izaak. *The Lives of John Donne, Sir Henry Watton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*. London: Oxford UP, 1927.
- Zunder, William. *The Poetry of John Donne: Literature and Culture in the Elizabethan and Jacobean Period*. Brighton, Sussex: Harvest P, 1982.

赤松佳子『ジョン・ダンの修辞を読む』大阪：大阪教育図書，2009.

岡村真紀子『パラドックスの詩人 ジョン・ダン』東京：英宝社，2008.

{Bibliography}

Baumlin, James S. *John Donne and the Rhetorics of Renaissance Discourse*. Columbia: U of Missouri P, 1991.

Bloom, Harold. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York: Chelsea, 1986.

Clement, A.L. "Donne's 'Holy Sonnet XIV.'" *Modern Language Note* LXXVI (June, 1961): 484-489.

Donne, John. *Biathanatos*. New York: Arno, 1977.

----. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Smith. London: Allen Lane, 1974.

----. *The Complete English Poems*. 1971. Ed. A. J. Smith. London: Penguin, 1996.

----. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Patrides. Everyman, 1991.

----. *The Complete English Poems*. Ed. C. A. Smith. London: Penguin, 1996.

----. *The Complete Poetry of John Donne*. (Anchor Seventeenth Century Series). Ed. John T. Shawcross. New York: Doubleday, 1967.

----. *The Elegies and the Songs and Sonnets*. Ed. Helen Gardner Oxford: Clarendon P, 1970.

----. *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne. v.7. Part 1: The Holy Sonnets*. Ed. Cary A. Stringer. Bloomington: Indiana UP, 2005.

----. *John Donne's Poetry*. Ed. Arthur L. Clements. New York: Norton, 1992.

----. *John Donne: Selected Prose*. Chosen by Everyn Simpson, Helen Gardner and Timothy Healy, eds. Oxford: Clarendon, 1967.

----. *The Satires, Epigrams and Verse Letters*. Ed. W. Milgate. Oxford: Clarendon, 1967.

----. *Select Poems of John Donne*. 松浦嘉一編注 東京：研究社，1983.

----. *The Songs and Sonnets of John Donne*. 1956. 2nd. ed. Ed. Theodore Redpath. London: Methuen, 1983.

----. 『ジョン・ダン詩集』星野徹訳 東京：思潮社，1968.

----. 『ジョン・ダン全詩集』湯浅信之訳 名古屋：名古屋大学出版会，1997.

Donnelly, John Patrick. *Ignatius of Loyola: Founder of the Jesuits* (The Library of World Biography). Ed. Peter N. Stearns. New York: Pearson Longman, 2004.

Eliot, Thomas Stearns. *Essays Ancient & Modern*. London: Faber and Faber, 1936.

Evans, G. Blakemore. "Two Notes on Donne: 'The Undertaking'; 'A Valediction: of my Name, in the Window'", *Modern Language Review* 57(1962) : 60-2.

Fausset, Hugh l'Anson., ed. *John Donne's Poems*. London: Dent, 1958.

- Flynn, Dennis. *John Donne and the Ancient Catholic Nobility*. Bloomington: Indiana UP, 1995.
- Frost, Kate Gartner. *Holy Delight: Typology, Numerology, and Autobiography in Donne's Devotion upon Emergent Occasion*. Princeton, N. J.: Princeton UP, 1990.
- Gardner, Helen, ed. *John Donne: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, c1962.
- . *Religion and Literature*. London: Faber and Faber, 1971.
- Grierson, Herbert John Clifford. *Criticism and Creation: Essays and Addresses*. London: Chatto, 1949.
- . *The Poem of John Donne*. Vol. 2. London: Oxford UP, 1951.
- . *Donne's Poetical Works*, Vol. 2. London: Oxford UP, 1912.
- Guibbory, Achsah, ed. *The Cambridge Companion to John Donne*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Healy, T. S. *John Donne: Ignatius His Conclave*. London: Oxford UP, 1969.
- Jackson, Robert S. *John Donne's Christian Vocation*. Evanston: Northwestern UP, 1970.
- Kermode, Frank. *Shakespeare, Spenser, Donne: Renaissance Essays*. London: Routledge, 1971.
- Keynes, Geoffrey. *A Bibliography of Dr. John Donne: Dean of Saint Paul's*. 4th, ed. Oxford: Clarendon, 1973.
- . *John Donne*. London: British Writer and Their Work, 1964.
- Kiernan, V. G. *State & Society in Europe 1550-1650*. Oxford; New York, NY, USA: Basil Blackwell, 1980.
- Kristeller, Paul Oskar. *Renaissance Thought II: Papers on Humanism and The Arts*. New York: Harper and Low, 1965.
- Leishman, J. B. *The Monarch of Wit*. 1951. London: Hutchinson, 1962.
- Levenson, J. C. "Donne's Holy Sonnets, XIV." *Explicator* XI (March, 1953) : 31.
- Levenson, P. C. [sic] "Donne's Holy Sonnets, XIV." *Explicator* XII (April, 1954) : 36.
- Louthan, Doniphan. *The Poetry of John Donne: A Study in Explication*. New York: Bookman Associates, 1951. Westport: Greenwood, 1976.
- McEachern, Claire and Debora Shuger, eds. *Religion and Culture in Renaissance England*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Parfitt, George. *John Donne: A Literary life*. Houndmill: Macmillan, 1989.
- Payne, Frank Walter. *John Donne & his Poetry*. New York: AMS P, 1971.
- Pinka, Patricia Garland. *This Dialogue of One: The Songs and Sonnets of John Donne*. Alabama: U of Alabama P, 1982.
- Read, Herbert. *Phases of English Poetry*. London: Faber and Faber, 1948.
- The Riverside Shakespeare*, ed. G. Blakemore Evans, et al. Boston: Houghton Mifflin, 1974.

- Sidney, Philip. *An Apology for Poetry, or, The Defence of Poesy*. Ed. Geoffrey Shepherd. 3rd ed. Rev. and expanded by R. W. Maslem. Manchester: Manchester UP, 2002.
- Simpson, E. M. Chosen. *John Donne, Selected Prose*. Ed. Helen Gardner and Timothy Healy. Oxford: Clarendon, 1967.
- Stanwood, P. G. and Heather Ross Asals, eds. *John Donne and the Theology of Language*. Columbia: U of Missouri P, 1986.
- Sullivan, Ernest W., ed. *The First and Second Dalhousie Manuscripts: Poems and Prose*. By John Donne and Others. Columbia: U of Missouri P, 1988.
- Summers, Claude J, and Ted-Larry Pebworth, eds. *The Eagle and The Dove: Reassessing John Donne*. Columbia: U of Missouri P, 1986.
- Watson, Robert N. *The Rest is Silence: Death as Annihilation in the English Renaissance*. Berkeley: U of California P, 1994.
- Williams, Penry. *The Tudor Regime*. Oxford: Clarendon, 1979.
- 佐山榮太郎『研究社 英米文学評傳叢書 — 8 — ダン』東京：研究社, 1980.

(やまもと ちずこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：松本 真治 准教授)

2009年9月29日受理